特集
選挙の風景

選挙に参加するということ
―フィリピン―

日下 渉

フィリピンで選挙を観察していると、投票所で一票を投じることだけが選挙への参加ではないのだと痛感する。フィリピン人による選挙への関わり方は多様で、しばしば祝祭のようだと称されるほどの熱量が込められている。

正副大統領は六年ごとに選出される。上院議員の任期も六年だが、三年ごとに議席二四の半数一二が改選される。下院議員（議席定数の八割は小選挙区制、二割は政党名簿の比例代表制）、州知事、地方首長、地方議員は三年ごとだ。一九八六年の民主化から六年ごとに統一選挙が行われてきた。投票日は五月の第二月曜日で、三カ月前の二月から選挙運動が開始される。投票資格は、一八歳以上のフィリピン人で、海外出稼ぎ中でも不在者投票できる。二〇一六年には国内で五四四〇万人が有権者登録をし、四〇〇〇万人ほどが実際に投票した。投票率は八二％だ。一八歳から三五歳の若者が有権者人口の三七％を占めた。海外では一三八万人が有権者登録をし、そのうち三二％が投票した。

フィリピンでは、政党を基準に候補者を選ぶのが難しい。政党システムが極端に流動化していて、政策やイデオロギーをめぐる政党間の対立も不明瞭だからだ。選挙後、当選した大統領の政党に大量の国会議員が党籍変更するのもお馴染みである。地方政治の候補者からすれば、政党が支持の調達に役立たないので、様々な資源やサービスを貧困層に配分するネットワークを自ら形成せざるをえない。そのため、貧困層はどのネットワークに自分が属しているかで投票を決めることが多い。他方、正副大統領選挙と上院議員選挙は、全国をひとつの選挙区として争われるため、個々の有権者の具体的な利益とそれほどはっきり結びつかない。そのゆえ、候補者のパーソナリティと、彼らがフィリピンをどのように変革するのか訴える言葉が重要になる。

一九九二年の大統領選挙では、腐敗と戦う「国民の連帯」という言葉が、ピープル・パワーの立役者ラモスを当選させた。この言葉は、アキノ元大統領が逝去してピープル・パワーの記憶が蘇った二〇一〇年にも、その長男を当選させた。これに対して、対抗エリートは、「貧者への優しさ」と不平等の改善を語り、貧困層の支持を狙って権力の座に挑んできた。一九九八年にはエストラダが当選したし、二〇〇四年には不正な票操作がなければポーが当選していたといわれる。貧困層にアピールする政治を批判して、経済発展を約束する「能力」も語られる。だが二〇〇四年にアロヨが辛勝した程度で、これまで大きな成功を収めたことはない。そして二〇一六年には、腐敗して混乱したシステムを正す「規律」を訴えたドゥテルテが、階層・地域・宗教を越えて支持を得た。

こうした言葉は、ポスター、テレビやラジオのCMを通じて、繰り返し有権者に投げかけられる。有権者は常に新たな「改革」を求めていて、その時々のフィリピンの課題を自分の視点から鑑みつつ、もっとも妥当と思われる「処方箋」に一票を投ずる。だが、いつ、誰の、どのような改革の言葉が彼らに響くかは、様々な要因が絡まりあって予測しにくい。

投票日が近づくと、候補者をめぐって、至る所で濃密な討議空間が創出される。日々の会話のなかで、「あなたの大統領だれ？」という問いも頻繁に繰り出される。「まだ考え中なんだ」といってお茶を濁す場合もあれば、「○○よ！」と支持する候補者について延々と話し出す人もいる。もちろん、候補者の評価をめぐって対立が生じることもあるので、これは

センシティブな問いでもある。だが、対立を恐れて黙り込むということはあまりなく、雄弁な人たちが多い。

こうした日々の討議を通じて、やがてその候補者を支持する「私たち」という共同性がつくられる。彼らは、各候補者への支持を表明する色とりどりのリストバンドなどを身につけて、政治的意思と集合的アイデンティティーを表明する。近年の選挙では、フェイスブックなどSNSが政治的討議の空間となり、共同性の創出に大きな役割を果たしている。そこでは、候補者の様々なエピソード、応援ソングやダンス、ジョークが拡散され、選挙戦にポップで陽気な雰囲気をかもしだす。ただし、自分の気に入らない候補者を支持する友人の投稿が目に入らぬよう、彼らのフォローをやめたり、SNSの「友人」から削除することも広がった。政治的対立で、フェイスブックのアカウントが「炎上」することもあった。

候補者の政治集会は、こうした共同性を体感できる場である。投票日の二日前、マニラ首都圏で開催される最終集会には数十万もの人びとが集まることがある。それらは、たいてい昼時のテレビ・ショーの形式に基づいて行われる。芸能人が歌やダンスを披露し、司会者が参加者とステージ上で一緒にゲームをしたりもする。バンドの演奏も欠かせない。ステージ上の演出を眺めるだけでは飽き足らず、会場にサンバ・ドラムを持ち込んで演奏したり、顔にペイントしたり仮装するなど、様々な形で参加する者も多い。バッジやTシャツなど、様々な応援グッズを自ら作って販売する者たちもいる。

投票日の前日、日曜日の午前〇時からは酒の販売が禁止され、いつもは深夜まで営業している雑貨店やバーも早々と店を閉める。とはいえ、その前に酒を買い込んで政治談議をしつつ家で飲む者も多い。投票日には午前六時から投票所が開かれ、投票所の周りは人だかりになる。各陣営の運動員は、候補者の名前が記された「見本投票用紙」を配る。それらを受け取りつつ投票所に行くと、多くの人びとと列に並んで辛抱強く投票の順番を待つ。その周りでは、露天商がアイスや飲み物を売っている。

投票所の運営を任されるスタッフは公立学校の教員で、PPCRV（責任ある投票のための教区会議）のボランティアがそれを支援する。PPCRVはカトリック教会の信徒団体による組織で、選挙管理委員会の公認のもと選挙監視に当たる。二〇一六年には全国九万二五〇九の投票所で、大学生などの若者を中心に七〇万人のボランティアが活躍した。投票所に着いた投票者は、まず有権者名簿から自分の名前と番号を探し出すのだが、それを助けるのも彼らの仕事だ。

投票所には、各候補者から数百ペソの給料で雇われた選挙監視人も沢山いる。彼らは選挙管理委員会やPPCRVと並行して、自候補の票の集計にあたる。かつては選挙スタッフが投票用紙を一枚一枚数えて集計用紙に記入するのを監視し、選挙結果をメモして本部に伝えた。しかし、二〇一〇年から投票と集計が機械化されたので、投票所の機器が印刷した結果を携帯メールで本部に送信するだけでよくなった。

集計が機械化されて以来、選挙結果を知るのも格段と早くなった。選挙管理委員会の自動集計は当日から夜を徹して行われ、翌日には選挙結果の大勢が判明する。人びとはテレビで開票作業の進展を見守る。二〇一六年には、ドゥテルテの大統領当選が早々に明らかになった。すると「閉店セール！覚醒剤一キロ一〇ペソのみ！私たちの新ビジネス葬儀屋をお待ちください！」といったブラック・ジョークが飛び交った。ドゥテルテの強硬な麻薬対策と犯罪者の処罰をネタにしたジョークだ。候補者をネタにした様々なジョークが飛び交うのも選挙の風物詩である。

他方、副大統領選挙は、ロブレドとマルコスによって僅差で争われた。当日夜の開票ではマルコスが優勢だったが、翌朝にはロブレド優位に変わったため、ロブレド支持者は寝起きとともに歓喜の声を上げた。ロブレドの当選は、五月二七日に議会の公式集計で確定した。こうして選挙結果が判明することで、数カ月の熱狂は幕を閉じる。惜敗したマルコスは再集計を求めたが、有権者は冷静だった。「多くの懸念があったけど、無事に選挙を終えられて良かった。おめでとう！」といった言葉が駆け巡った。最大の勝者は、民主化から五回目の統一選挙を成功させたフィリピン人だった。

（くさか　わたる／名古屋大学大学院国際開発研究科准教授）